

日本初のワープロと毎日新聞

■新編集講座 ウェブ版 第146号 2020/4/15

毎日新聞社 制作技術本部長（元・大阪本社編集制作センター室長） 三宅 直人

前回の「手書きの時代 私が新入社員だったころ その5」で、私が入社した1981年当時、新聞の原稿は手書きをしていたこと、理由としてワープロがまだ普及していなかったことを紹介しました。今やワープロ使用は当たり前ですが、国産ワープロ1号機開発に、毎日新聞の技術陣が関わっていました。その経緯を振り返ります。

■ かつてはあった専用機

最初におことわりしておく、前文で触れた「ワープロ」とは、パソコンのソフトではなく、専用機を指しています。こう書くと、中高年の方は「何を当たり前のことを」と不審に思い、若い方は「そんな機械があったのか」と驚くかもしれません。

そうです。かつては、文章の作成・編集と印刷に特化したワープロ専用機という機械が存在していました。20年ほど前までは、家電量販店でも人気商品だったのです=写真①。その専用機の機能がパソコンのワープロソフトに受け継がれています。

こうした説明が必要なこと自体、技術進歩の速さを象徴しています。既に姿を消したワープロ専用機の普及前、手書き原稿が主流だった時代=写真②=に入社した私は、大昔の人間のような

■ 記事を書くだけで活字入力になれば

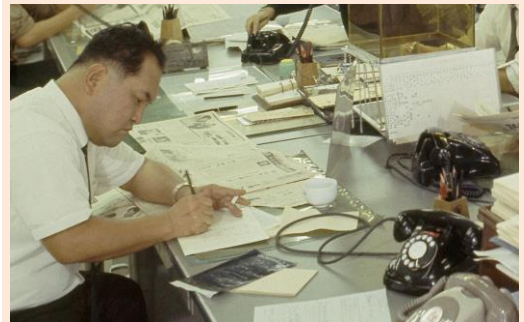
ワープロ開発について「端緒となる発想は、毎日新聞社の中から生み出された」という本紙記事を見つけました=図③（この経緯は、NHKで放映されたり、本が出版されたりもしています=右欄参照）。

記事によると、1971年（大阪万博翌年で高度成長期）、毎日新聞社電信課（現・技術センター）は、原稿の送信速度アップのため、東芝と新システム開発に乗り出しました。当時は、記者の手書き原稿をパンチャーが入力し、入力機が吐き出す紙テープを活字鑄造機にかける——という時代です。この紙テープを使い、支局と本社間や各本社間の送稿をしていましたが、実用化段階に入ったコンピューターを活用し、速報性を高めるのが課題でした。

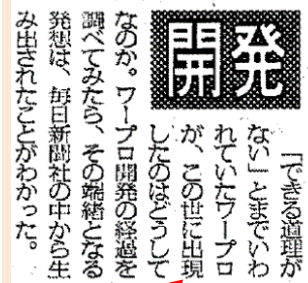
弓場晋太郎技師らが率いたチームでは、「高速化も必要だが、何回も入力するのはむだ」という声が出ました。記者が記事を書くのを「入力」と考えれば、執筆、本社や支局での電話受稿、パンチャー入力と、3回繰り返されます。「記者が記事を書くだけで、活字の入力となる」新手法を作ろう、と考えたのでした。



(上) ①東京・秋葉原の家電量販店店頭に並ぶワープロ専用機=1991年



(上) ②原稿を手書きしていた昭和の編集局。黒い電話と記者が指にはさんだタバコに時代を感じます
(左) ③1989年8月24日毎日夕刊総合面



「プロジェクトX」と「匠(たくみ)の時代」

ワープロ開発と毎日新聞社の関わりは、NHKテレビ「プロジェクトX」で、「運命の最終テスト ワープロ・日本語に挑んだ若者たち」というタイトルで放映されました(2002年9月3日)。DVDも発売されています。また、経済評論家・内橋克人さんの著書「新版 匠の時代 第3巻」(岩波現代文庫)の「ワープロ誕生の日」という章に掲載されています

■ 「愛」のない機械なんて

弓場技師らのテーマは、送稿システムから入力機に変化。東芝総合研究所の森健一研究員=写真④=に相談しました。森さんは、「技術革新には新しいアイデアが必要」というのが持論で、お客さんから持ち込まれる「無理難題」を待ち望んでいたのです。

森さんは毎日新聞社に通い詰め、新聞制作工程を研究。新製品の目標を三つに絞り込みました。「手書きより速く書け」「持ち運びでき」「遠隔地に通信できる」。ワープロそのものです。

森さんが作った試作機は、幅 45 セン、奥行き 30 セン、高さ 18 センで、アタッシュケースのような外觀=図⑤。2500 の漢字とかなを 5 ミリ角のマス目に並べ、電子ペンでタッチする仕組みです。でも「手書きより速く」という条件を満たせませんでした。大ききの制約から文字数も制限。毎日新聞紙面での使用頻度を基に選んだものの、例えば「愛」などの重要な字が入りませんでした。

■ 学習するシステム

ペンタッチ方式で行き詰まった森さんは、「かな漢字変換」という手法に切り替えました。漢字を直接入力するからキーが増える、かななら 50 ほどしかない、まずかなで入力し、次に漢字に変換する 2 段階方式にすればいい——突破口が開けました。

ただ日本語は同音異義語が多く、例えば「こうえん」なら、講演、公演、後援、公園……などの候補があります。そこで後ろに「する」が付く単語と付かない単語を区別し登録。「こうえんする」なら「公園」は候補から外す仕組みを開発しました。

また、最初が「交渉」なら、次の「こうしょう」も「交渉」の可能性が高い、だから次には最優先で表示する短期学習機能。そのワープロの使用開始以来、使われた回数の順番に同音異義語を表示する長期学習機能。画期的な方法が次々考案されました。

■ デビューから普及、そして退場

東芝のホームページによると、日本初の実用的かな漢字変換システムが 1978 年に完成。別に開発した表示装置などと一体化させ、同年 9 月 26 日、日本初の日本語ワープロとして発表しました。この機械は、川崎の東芝施設に保存されています=右欄参照。

この 1 号機は 600 万円超。その 3 年後、私が入社した 81 年当時も 1 台数百万円しました。しかしワープロの便利さが評価され、80 年代に急速に普及。低価格化と小型が一気に進みました。私は、84 年か 85 年ごろ、十数万円を奮発し中古機を買いました。

しかし 90 年代に入ってパソコンとインターネットが普及。ワープロ機能はパソコンに取り込まれ、ワープロ専用機は 2000 年前後に生産が終了しました=図⑥。そのジェットコースターのような興隆については、機会を改め触れることにします。



(上) ④ワープロ開発の歩みを振り返る森健一さん=2010年

(右) ⑤1989年8月29日 毎日夕刊総合面。掲載写真は試作機



川崎の東芝未来科学館に保存

日本初のワープロは、JR川崎駅前の東芝未来科学館に保存されています。プリンターも含め、事務机一つ分の大きさ=写真⑤。価格は1台 630 万円だった。サイズも価格も、時代の隔たりを感じさせます。ちなみに同館には、創業以来の主要商品が展示されています。初代のテレビ受像機もありました=写真⑦⑧。当時の毎日新聞が掲示され、ラジオ欄の片隅にテレビ番組コーナーがありました=写真⑨⑩。



(左) ⑥2000年6月21日 毎日朝刊(東京)1面